

平成23年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	23K20	氏名	石坂 直美
研究主題 —副主題—	教師が個性を生かし主体的につくるカリキュラム・マネジメントの在り方 ～セルフエスティームを高め、学び合いながら成長する学校づくり～		
所属校	北区立西ヶ原小学校	派遣先	早稲田大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>「生きる力」の重要な要素である基礎的・基本的な知識・技能の定着と思考力・判断力・表現力等の育成の双方を図っていくにあたっては、個々の子供たちの理解や習熟度等に応じたきめの細かい指導が必要となる。また、自分に自信がもてず、将来や人間関係に不安を抱えている子供たちに、学級指導や体験活動、個別指導などを通じ、他者や社会と向き合うことのできる確かな手応えを感じさせるためには、これまで以上にそのための時間が確保できるよう条件整備を行う必要がある。そして、授業研究といった教師の工夫と相まって教育の質の向上を図っていくためには、何よりも、まず、教師が一人一人の子供たちと向き合い、指導を行うための時間を確保することが重要である。</p> <p>平成17年10月に中央教育審議会が「新しい時代の義務教育を創造する(答申)」の中で述べているように、学校が生き生きと活気ある活動を展開していくためには、広い視野に立った学校づくりや学校全体のカリキュラムの在り方、教員の指導等について、教員一人一人が今まで以上に考えていく必要がある。そして、学校の教育活動を充実させるためには、全教職員でカリキュラム・マネジメントに取り組んでいくことが重要であり、それを推進している実習校の教育活動を学ぶことにより、魅力ある学校づくりに貢献できるカリキュラムコーディネーターとして、他の教員をリードする力を付けたいと考えた。</p>
II 研究の方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. インタビューによる調査と分析 (教職員・スクールコーディネーター・地域支援員・スクールカウンセラー等) 2. 児童の意識調査と実態調査 3. 校内研究成果の実態調査と分析、研修会への参加 4. 系統的・継続的評価の検証の提案 5. 児童のセルフエスティームを高める協働学習の提案
III 研究の結果	<p>実習校の6年間の系統的なカリキュラムは、「いのちの学習」、「Yes, Andのコミュニケーション」、「MIの視点を生かした授業改善の工夫」の3つの柱を中心にした教育活動であり、これらは、すべての学習活動と学校生活をつなげている。その根底にあるのは、教師も子供もセルフエスティームを高めながら、コミュニケーション能力を身に付けさせようとするところである。子供と教師は互いの姿を映し合う鏡のような存在と考え、まずは教師同志が学び合える関係であろうとし、プロフェッショナルコーチの指導の下、学校力を高める研修に取り組んでいる。その結果、教師の子供への関わり方や対応が変わり、子供同士のトラブルが減るとともに、保護者が教師を受容するようになり、教師に疲弊感や多忙感がなくなった。そして、教師の個性を認め合える同僚性が生まれ、協働体制がつけられるようになった。</p>

	<p>この実践から、教師が個性を生かし主体的に創り上げるカリキュラム・マネジメントとは、①PDCA サイクルが明確で共通理解がある。②教師の集団的力量的向上を図るため、同僚性の構築に努めている。③管理職を含めた教職員が、相互信頼と認め合いの教師文化を醸成している。④協働による教育課程経営の体制がつけられている。⑤保護者や地域との一体的な学校・教育課程作りにより、信頼関係を築いている。⑥ハード面とソフト面、トップダウン型とボトムアップ型の融合がバランスよく醸成されることが重要であるという構造が明らかになった。</p> <p>教師が組織として同じビジョンをもって取り組んできた教育効果は、単元レベルの評価はもちろんであるが、小学校6年間の系統的なカリキュラムを通じた評価も必要であり、短期評価と長期評価に分けて検証する必要がある。したがって、目指す子供像に沿ったパフォーマンス課題やプロジェクトに対する評価も含めて、長期的な評価の観点を学校全体で共有し、ポートフォリオ等の子供の成果物を残して検証することを提案した。</p>
<p>IV 考察</p>	<p>教師は、子供の姿や能力を様々な場面（教科や活動）の中で複眼的に見ていかなければならない。また、全ての教職員から見た子供の姿を統合したり、系統的なカリキュラムの中で継続的・多面的に見たりしながら評価していくことが大切である。そのためには、カリキュラム評価の検証を、単元を単位とした授業評価を中心に行い、ICT等を活用し、学習の記録を共有すること。そして、パフォーマンス評価やポートフォリオ等の記録を蓄積した上で、定期的に見直す質的評価が必要である。また、カードを使ってまとめていく方法の活用で評価の共有をすると共に、外部評価や学力調査もカリキュラム評価の一環として行い、その結果をカリキュラムの改善に生かすことで、他の学力とどのように結びついているのかを検証することが必要である。</p> <p>教育課程は本来、教師の具体的な活動のために作るものであり、実際の指導活動に役立つもの、点検評価が可能なもの、具体的な子供を念頭に置いて編成したものでなければならない。したがって、計画レベルだけでなく、実施レベル、結果レベルまでを含むカリキュラム編成が教師の手で行われなければならない。ゆえに、カリキュラム・マネジメントとは、いかに素晴らしい教育課程（計画）を作るかではなく、いかに運営するかが重要である。カリキュラム開発の主体者は教師であり、そこには、教師の力量的差、教師の意欲の差があり、組織として行動することが苦手な教師がいるということがしばしば問題にされる。しかし、教師の個性を生かし、同僚性を高め、組織力を高めることなくしては、学校力を高めることはできない。今後の課題としては、自分があらゆる場面のファシリテーターとして成長していくことである。</p>